場所から考える高齢者の地域居住

第2回　「ひがしまち街角広場」が作り変える地域

Ibasho Japan　副理事長／千里ニュータウン研究・情報センター　事務局長　田中　康裕

1. 「まち」と居場所

大阪府千里ニュータウンの新千里東町に開かれた「ひがしまち街角広場」は、「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」を目指して開かれた「まちの居場所」である（**写真1**）。2001年9月30日のオープンから、17年以上にわたって地域住民がボランティアのスタッフとして運営を担い、補助金に依存しない運営を続けてきた。前回「ひがしまち街角広場」は、属性、所属、参加、交流、目的といった枠組みに収まらないことが許容されると同時に、地域を作りあげる当事者になれる場所として、一人ひとりの地域居住を支えていることをみた（田中, 2018）。今回はやや視野を広げて、「ひがしまち街角広場」と地域との関わりをみていきたい。

「ひがしまち街角広場」オープンのきっかけは、2000年に新千里東町が建設省（現・国土交通省）の「歩いて暮らせる街づくり事業」のモデルプロジェクト地区に選定されたことである。当時の千里ニュータウンは、まち開きから約40年が経過し「人口の減少と高齢化、住宅・施設の老朽化、近隣商業地区の低迷などの問題を抱え、『今やニュータウンはオールドタウンである』と言われる」こともあった（山本ほか, 2001）[1]。新千里東町も例外ではない。人口は減少し（**図1**）、最大で1,400人以上いた小学校の児童は約200人にまで減少していた（**図2**）。近隣センターには、空き店舗が目立つようになっていた。新千里東町が「歩いて暮らせる街づくり事業」のモデルプロジェクト地区に選定されたのは、「急激な少子・高齢化、小売店舗の撤退、施設の朽化の進行等の課題に対

写真1　最近の「ひがしまち街角広場」

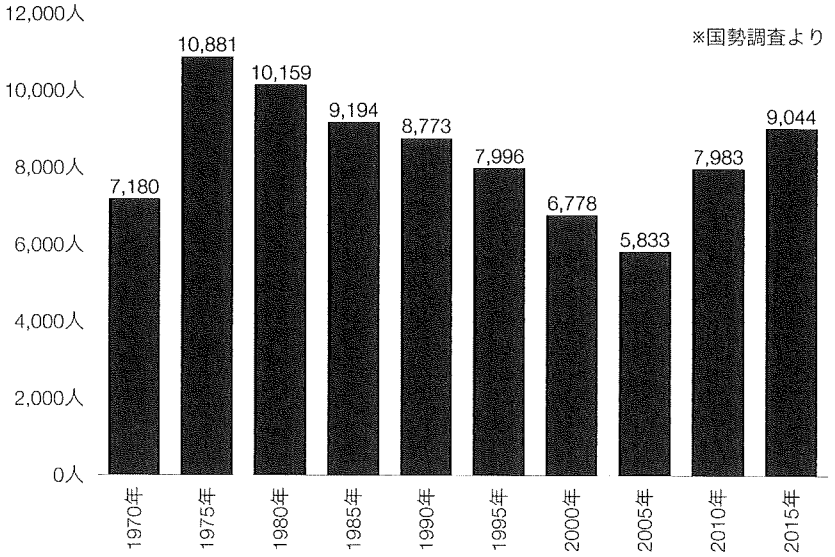


図1　新千里東町の人口推移

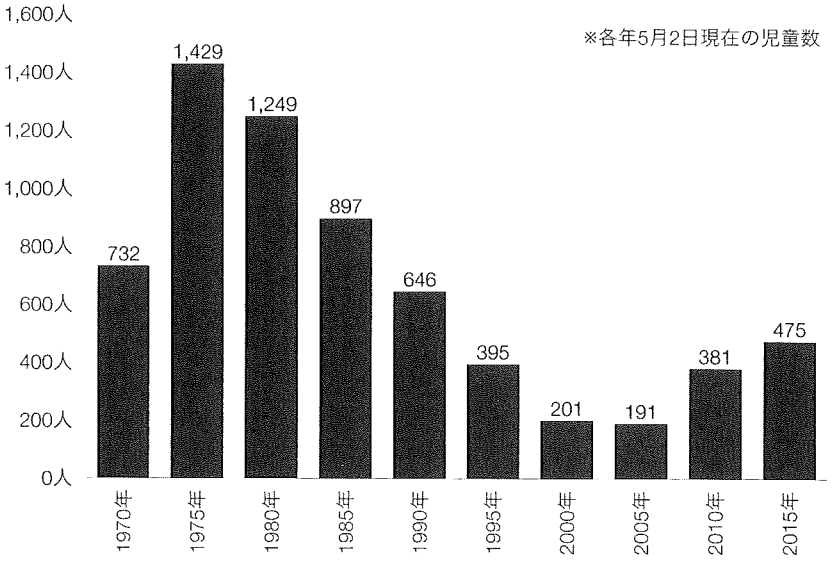


図2　東丘小学校の児童数の推移

し、新たなまちづくりを検討する上でのモデルとなることが期待」[2]されたからである。

「歩いて暮らせる街づくり事業」では、住民へのアンケート、ヒアリング、ワークショップが行われ、これらをふまえて「①多世代居住のための多様な住宅を」、「②学校をコミュニティの場へ」、「③近隣センターを生活サービス・交流拠点へ」、「④千里中央を生活・文化拠点へ」、「⑤公園を緑の交流拠点へ」、「⑥緑道を出会いのある交流空間に育てよう」、「⑦交流とまちづくりのための場と仕組みを育てよう」の「7つのまちづくり提案」がなされ、②③⑥は社会実験として取り組むことが提案された（山本ほか, 2001）。

このうち提案③に関わる社会実験として、近隣センターの空き店舗を活用して2001年にオープンしたのが、「ひがしまち街角広場」である。同じ2001年には、提案②を受け小学校の空き教室を活用したコミュニティ・ルームが開かれた。2002年からは提案⑥に関わることとして、歩行者専用道路を地域住民自らが清掃する「アダプト活動」が始められた（**写真2**）[3]。

「7つのまちづくり提案」以外にも、2001年には地域新聞『ひがしおか』が創刊され、小学校児童の父親グループ「東丘ダディーズクラブ」が設立された。2002年からは、小学校の運動会と地域の運動会とが「東丘ふれあい運動会」として合同で開催されるようになった[4]。

このように2000年頃の新千里東町では、その後の地域のあり方に大きな影響を与える動きが相次いで生じている。「ひがしまち街角広場」は、こうした動きの1つとして生まれた場所なのである。

写真2　新千里東町のアダプト活動

写真3　スタッフと来訪者がともに過ごす

2. 「まち」が居場所にもたらす課題

「ひがしまち街角広場」は地域と密接に関わって成立している。このことは同時に、「ひがしまち街角広場」は地域が抱える課題と無関係でないことを意味する。

現在「ひがしまち街角広場」で大きな課題になっているのは、スタッフの後継者を見つけること、運営場所を確保することである。

◆スタッフの後継者

新千里東町は、千里ニュータウン12住区の中で唯一、戸建住宅がなく、全ての住戸が集合住宅で構成されている。そのため半世紀前のまち開きの際にも、近年の集合住宅の建替えの際にも、同じ世代の人々が一斉に入居する傾向があり、住民の年齢が特定の世代に偏っている。

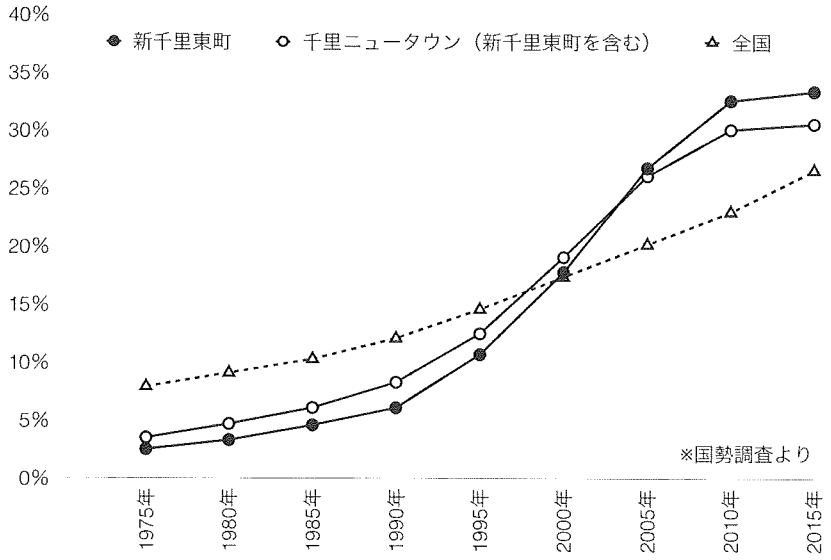


図3　新千里東町の高齢化率の推移

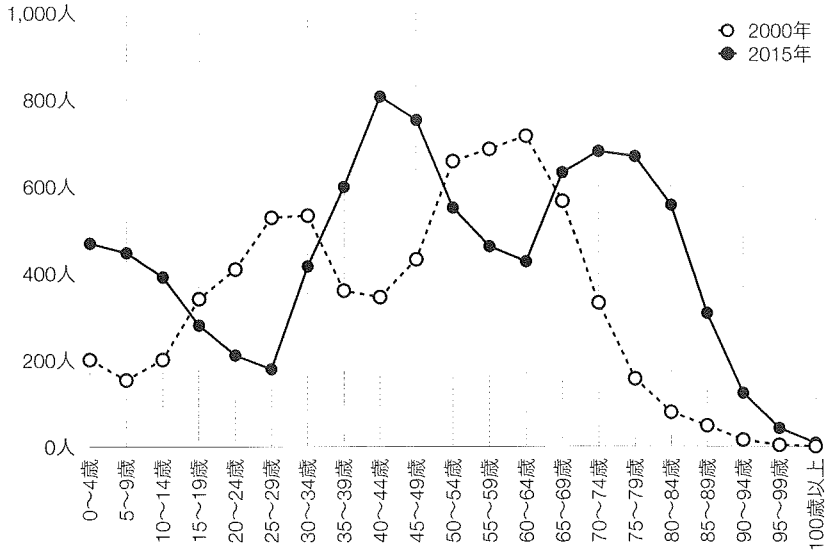


図4　新千里東町の住民の年齢構成

新千里東町の高齢化率は、入居当初は全国平均を下回っていたが、「ひがしまち街角広場」オープン前年の2000年には17.8%に上昇し、全国平均を上回るようになっていた（**図3**）。ただし第一世代[5]の人々の中心は50～64歳であり、まだ定年を迎えていない男性も多かった（**図4**）。当時、ベッドタウンである千里ニュータウンにおける地域活動の主な担い手は、第一世代の女性だった。この時期にオープンした「ひがしまち街角広場」のスタッフ全員が女性である1つの要因はここにある。第一世代の女性は、千里ニュータウンでの半世紀にわたる暮らしを共有しており、このことが「ひがしまち街角広場」で主客の関係がサービスする側／される側に、完全に分かれていない緩やかな関係が築かれている背景になっていると考えることができる（**写真3**）。

「ひがしまち街角広場」の運営は、現在も第一世代の女性が中心となり担っている。2015年時点の新千里東町の高齢化率は33.4%とさらに上昇し、第一世代の中心は70代になった。けれども、そのすぐ下の世代の人々は極端に少ない。次に人口が多いのは40代だが、共働きの夫婦が多い、ベッドタウンである千里ニュータウン内に仕事場がほとんどないなどの理由で、この世代の人々は昼間地域にいない。こうした地域の状況は、スタッフの後継者を見つけることを困難にしている大きな要因となっている。

◆運営場所

現在、新千里東町の近隣センター（**写真4，5**）は移転・建替の計画が進められている（**図5**）。移転・建替は「土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新を図り、周辺地域と調和の取れた良好な市街地環境を形成する」[6]ことを目的に行われるもので、近隣センターがある土地（**図5の西1地区**）には分譲マンションが建設され、近隣センターの店舗は新千里東町の周辺部（**図5の東地区**）に移転する。集会所、郵便局、保育施設などが入る公共施設は分譲マンション脇（**図5の西2地区**）に建設される予定である。

近隣センターとは、千里ニュータウンにおいて地域の核となる場所で、歩いて

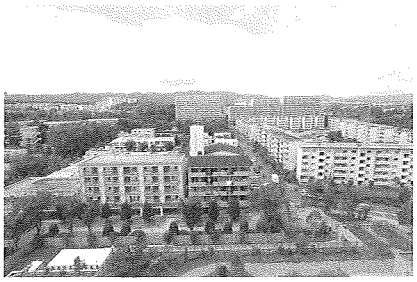


写真4　新千里東町近隣センター①（写真手前）

写真5　新千里東町近隣センター②

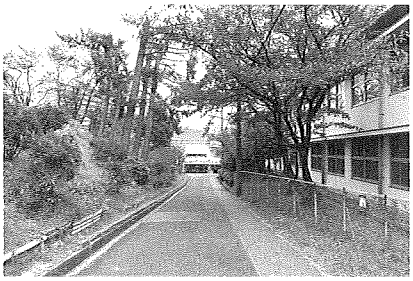
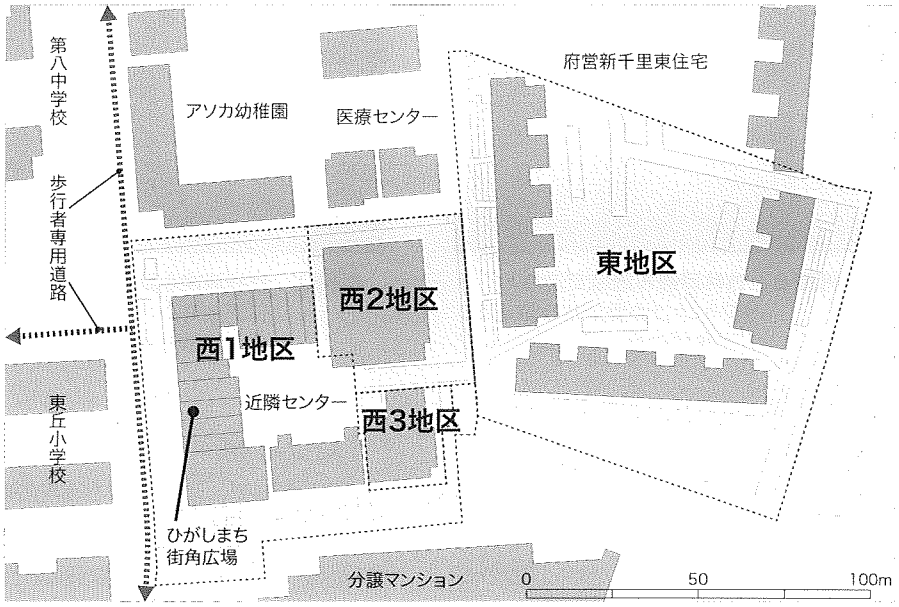


写真6　歩行者専用道路と近隣センター（正面の建物）



豊中市「新千里東町近隣センター地区市街地再開発事業に関連する都市計画の決定及び変更のお知らせ」のページには以下の計画が記載されている。
[西1地区] 中高層住宅等の立地を図る。
[西2地区] コミュニティ施設等の立地を図る。
[西3地区] 商業及び中高層住宅等の立地を図る。
[東地区] 商業及び中高層住宅等の立地を図る。

図5　新千里東町近隣センターの移転・建替計画

日常生活を送るために日用品を扱う店舗や集会所、郵便局などがもうけられている。近隣センターは住区の中心付近に、歩行者専用道路に面して配置されており**(写真6)**[7]、周囲には、幼稚園、小・中学校、医療センターがある。「歩いて暮らせる街づくり事業」における「③近隣センターを生活サービス・交流拠点へ」という提案は、近隣センターの役割を見直すことを意図していた。現在進められている移転・建替の計画は、この近隣センターのあり方を大きく変えようとするものである。

「ひがしまち街角広場」が運営を継続するために現時点で考え得る選択肢は、新たに建設される近隣センターの店舗**(図5の東地区)**を借りるか、公共施設**(図5の西2地区)**内の集会所を間借りするかのいずれかになる。前者を選べば家賃の値上がりが予想されるため運営費の負担が大きく、また、歩行者専用道路から離れてしまう。後者を選んでも歩行者専用道路から離れるが、何よりも集会所は「ひがしまち街角広場」だけで使えないため運営時間や運営内容に制約が生じ、これまで大切にしてきた「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」でなくなる恐れがある。近隣センターの地権者と豊中市が中心になって進める移転・建替のプロセスに、テナントである「ひがしまち街角広場」が参加できる余地はなく、近隣センターの移転・建替を前に「ひがしまち街角広場」は大きな岐路に立たされている。

「ひがしまち街角広場」は「歩いて暮らせる街づくり事業」と、それを受けた豊中市の社会実験としてオープンした。半年間の社会実験終了後は、地域住民による「自主運営」が続けられてきた。社会実験期間中は行政からの支援を受けて運営されていたが、「自主運営」が始まってから地域住民は行政に依存せず、また、行政も地域住民を補助金漬けにすることはなかった。行政が最初のきっかけ作り、立ちあげのサポートを行い、それを地域住民が継承する。これは地域住民と行政との協働のモデルとして評価されるべき点である。

新千里東町における近隣センターの移転・建替は、「ひがしまち街角広場」を含めた地域住民と行政との新たな協働のかたちを築くチャンスでもあった。繰り返し述べるように、近隣センターは地域の核となる場所として計画された。半世紀前の計画に必ずしも縛られる必要はないが、近隣センターのあり方の大きな変更を伴う移転・建替を行うにあたって本来

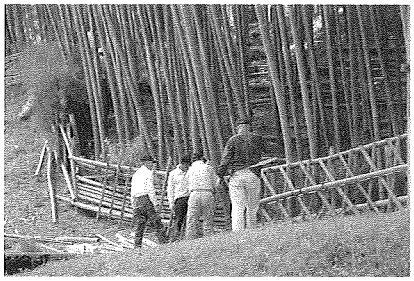


写真７　「千里竹の会」による
東町公園の竹林整備

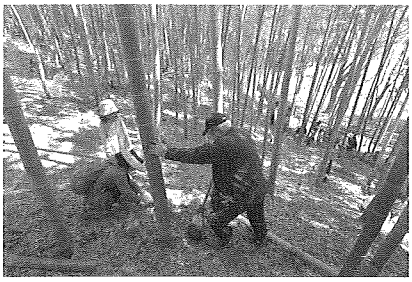


写真８　竹林清掃＆地域交流会①
（タケノコの掘り方を教える
「千里竹の会」メンバー）

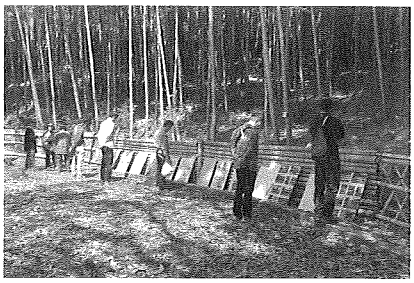


写真９　竹林清掃＆地域交流会②
（「ディスカバー千里」による
千里の歴史の展示）

求められていたのは、そのプロセスを近隣センターの地権者と豊中市だけでなく、広く地域住民にも開かれたものにすることだったと考えている[8]。

3. 居場所から「まち」へ

近隣センターの移転・建替を前にして「ひがしまち街角広場」は大きな岐路に立たされているが、そうであっても「ひがしまち街角広場」がこれまで実現してきたことの価値がなくなるわけではない。近隣センターの移転・建替の計画は進んでいるが、「ひがしまち街角広場」がこれまで実現してきたことを共有した上で、それを今後の地域に継承していくことが求められている。

日本では2000年頃から、既存の制度・施設の枠組みにあてはまらない新たなかたちの場所が、同時多発的に開かれてきた。筆者らは、こうした場所を「まちの居場所」と呼んでいる（日本建築学会編, 2010）。「まちの居場所」には、生活支援、介護、子育て、震災復興、商店街の活性化、地域で働くこと、退職後の地域での暮らし、貧困といった切実な、けれども既存の施設・制度の枠組みでは十分に対応できない課題に直面した人々が、自分たちの手で課題を乗り越えるために開かれているという特徴があり、「ひがしまち街角広場」はその先駆的な場所の１つである。

「まちの居場所」の先駆的な場所に注目が集まり、視察や調査が行われるのは、同様の試みを他の地域に広げたいと考えられるからである。そのための１つの方法が制度化（施設化）[9]であり、制度化（施設化）は一定の基準を満たした場所を多くの地域に設置していくことを可能にする。「まちの居場所」をモデルにした「通いの場」が、2015年施行の「介護予防・日常生活支援総合事業」（新しい総合事業）でサービスの１つに盛り込まれたように[10]、「まちの居場所」は既に制度に影響を与えている。

ただし、上に書いたように「まちの居場所」は、既存の制度・施設の枠組みからもれ落ちたものに対応しようとする試みであった。それを制度化（施設化）していくことは、「まちの居場所」の当初の狙いを十分に受け継いだものになるのかという疑問も湧いてくる。

「まちの居場所」はどのように広がっていくかに関して、「ひがしまち街角広場」では興味深い動きが生じている。そこからは制度化（施設化）とは異なる可能性が浮かびあがってくる。

①地域の活動を立ちあげる

「ひがしまち街角広場」は地域住民がお茶を飲みに立ち寄るだけでなく、地域活動を立ちあげていく場所にもなっている（田中, 2018）。

地域の団体が会議や活動に利用できる場所として、集会所や公民館がある。しかし、集会所や公民館は体制が整い、目的や内容がはっきりしている団体が利用する場所としては適している反面、メンバーを集めたり、活動の目的や内容をはっきりさせたりするなど、これから活動を立ちあげていく段階では利用しにくい。新たな活動は必ずしも集会所や公民館における会議で立ちあげられるわけでなく、事前に予約せずとも「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」における会話から生み出されることもある。

「ひがしまち街角広場」を通して立ちあ

写真10　「ひがしまち街角広場」前の掲示板

写真11　「ひがしまち街角広場」での展示・販売

写真12　まちかど土曜ブランチ

げられた地域活動のグループは、例えば「千里グッズの会」（2002年設立）[11]による千里ニュータウンのお土産の作成・販売、歴史の収集・発信、「千里竹の会」（2003年設立）による公園内の竹林整備、間伐した竹を使った竹細工・竹炭づくり（**写真7**）、「千里・住まいの学校」（2004年設立。2006年NPO法人化）による住まいのサポートと街の再生についての活動など、新千里東町の枠を越えた多様な活動を展開している。

2017年から「ひがしまち街角広場」は「千里竹の会」、「ディスカバー千里」、「東丘ダディーズクラブ」と連携し、東町公園で「竹林清掃＆地域交流会」を主催しており、住民が自分たちの地域の環境を維持管理する動きを生み出している（**写真8，9**）。

②活動の重なりの拠点となる

「ひがしまち街角広場」の掲示板には、地域新聞『ひがしおか』や各種の行事のお知らせなどが貼られている（**写真10**）。「ひがしまち街角広場」を起点として、学校の情報を地域に発信してはどうかという提案で、小中学校の学校通信が貼られていた時期もある。「ひがしまち街角広場」には地域の情報が集まってくることを、初代代表の赤井直さんは「地域の情報の交差点」と表現する。

壁などは作品展示のために開放されており、「千里竹の会」のメンバーによる竹細工、住民の手による写真や絵画、川柳などが展示されている（**写真11**）。

「ひがしまち街角広場」はいくつかのグループの活動場所にもなっている。「千里竹の会」は竹炭や竹酢液、「千里グッズの会」は千里ニュータウンの絵葉書を販売している。留学生を招いて出身国の街や暮らしをテーマに交流する「千里・住まいの学校」による「まちかど土曜ブランチ」（**写真12**）、「赤ちゃんからのESD」による「陶器とりかえ隊」（**写真13**）が開かれていた時期もある。

2015年12月、新千里東町近隣センターの空き店舗を活用して、社会福祉法人・大阪府社会福祉事業団が運営する「豊寿荘あいあい食堂」がオープンした。「豊寿荘

写真13　陶器とりかえ隊

写真14　豊寿荘あいあい食堂

写真15　「ひがしまち街角広場」内に掲示された「豊寿荘あいあい食堂」のメニュー

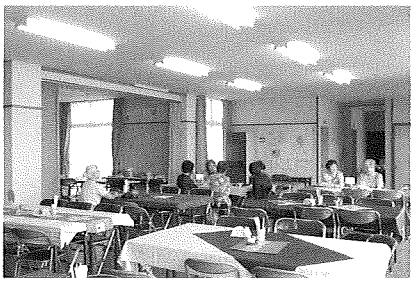


写真16　府営住宅新千里東住宅の「3・3ひろば」

写真17　府営新千里東住宅の集会所（写真中央）

写真18　千里文化センター・コラボ

あいあい食堂」では食堂の運営だけでなく、体操、編み物、脳トレ、健康麻雀など各種講座が開かれている**（写真14）**。「豊寿荘あいあい食堂」の講座の行き帰りに「ひがしまち街角広場」に立ち寄ったり、「豊寿荘あいあい食堂」で注文した食事を「ひがしまち街角広場」で食べたりする人もいる**（写真15）**。

「ひがしまち街角広場」はコーヒー、紅茶などの飲み物を提供しているだけであり、プログラムは提供していない。しかし、ここでみてきたような多様なかたちでの連携により、地域情報を集めたり、地域住民の手による作品やプログラムに触れる機会を提供したり、さらに食事の場所になったりと、「小規模多機能」と表現できるような多様な役割を担うようになっている。

「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」であることは、こうした連携を通した多様な役割を実現するための、言わばインフラとして機能していると言える。

③「同じような」場所の参考になる

新千里東町には、「ひがしまち街角広場」のような場所が欲しいと考えた人々により、いくつかの広場が開かれている。

府営新千里東住宅では、2009年7月から「3・3ひろば」が始められた**（写真16, 17）**。当時、府営新千里東住宅では建替えに伴い住民の一時的な移転が始まっていた。「3・3ひろば」は移転中の人、一人暮らしの人を含めた住民が集まるために始められた。府営新千里東住宅の集会所で毎月第2水・第4金曜の13時～16時に開かれており、コーヒー、紅茶などの飲み物が100円で提供されている。集会所は建替えられたが、現在も新たな集会所に場所を移して継続されている。

千里文化センター・コラボには、「子どもから高齢者まで様々な世代の交流の場となり、まちづくりにかかわる多くの文化や分野が共生する事業」を展開するために[12]、2010年4月に「コラボ交流カフェ」と多目的スペースからなる「コラボひろば」が開かれた（田中, 2010）。「コラボ交流カフェ」はコラボ市民実行委員会により火曜～土曜の週5日、10時～16時半に運営されており、コーヒー、紅茶、ジュースなどの飲み物が100～200円で提供されている**（写真18, 19）**。

2005年に竣工した分譲マンションの桜ヶ丘メゾンシティーには、「桜ヶ丘まちかど広場」という共用施設が設けられた**（写真20）**。分譲マンションの建替えに携わっていた会社の社員が「ひがしまち街角広場」を見て、建替え後の分譲マンションにもこのような場所が欲しいと考えたのがきっかけである。現在この共用施設では、毎月0と5のつく日（土日祝を除く）の13時～15時に「桜ヶ丘サロン」が開かれている。

新千里東町だけでなく、OPH千里佐竹台内に開かれた「佐竹台サロン」、新千里西町近隣センターにある笹部書店のカフェコーナー、新千里北町北丘小学校内の「畑のある交流サロン@Kitamachi」など、「ひがしまち街角広場」は千里ニュータウンの他の場所の参考になってきた（太田, 2018）。さらに、北海道北広島団地の「北広島団地地域交流ホームふれて」、三重県名張市の桔梗が丘自治連合会による「ほっとまち茶房ききょう」は、「ひがしまち街角広場」に見学に訪れた人々が開いた場所である。

制度化（施設化）がある一定の基準を設定し「同じ」場所を広げようとするのに対して、ここで紹介した場所にはそうした基準はない。「ひがしまち街角広場」が実現しているものに共感した人々が、自分

写真19　千里文化センター・コラボの「コラボひろば」

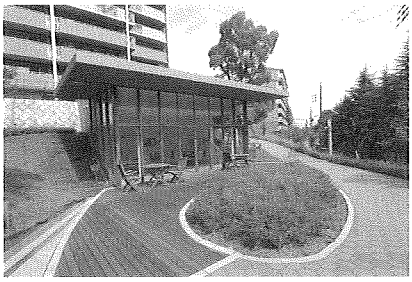


写真20　桜ヶ丘まちかど広場

たちの状況に合わせて開いた「同じような」場所である。

「ひがしまち街角広場」は「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」を目に見えるかたちで実現している。それを目にした人は、「自分たちの地域にもこのような場所が欲しい」という思いを描く。「ひがしまち街角広場」は、そこを訪れた人々に対して自分たちの地域でまだ実現されていない将来の姿を垣間見せている。

「ひがしまち街角広場」が生み出している「地域の活動を立ちあげる」、「活動の重なりの拠点となる」、「同じような場所の参考になる」という動きは、制度化（施設化）に比べるとささやかに思われるかもしれないが、新千里東町を目に見えるかたちで確実に作り変えており、その影響は他の地域にも広がっている。こうした動きは、繰り返し述べたように「ひがしまち街角広場」が「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」を実現しているからである。

「ひがしまち街角広場」は、属性、所属、参加、交流、目的といった枠組みに収まらないことが許容される場所として、地域を作りあげる当事者になれる場所として、一人ひとりの地域居住を支えきた。それと同時に、「ひがしまち街角広場」は地域居住の舞台である地域自体を作り変えてきた。

「まちの居場所」は「まち」との関わりにおいて成立しているが、「まちの居場所」はその「まち」自体を作り変えていく。

<参考文献・資料>

・太田博一（2018）「千里ニュータウンの市民活動の動きとコミュニティ再生の展開」・『都市住宅学』102号
・さわやか福祉財団編（2016）『シリーズ住民主体のサービスマニュアル　第3巻居場所・サロンづくり』全国社会福祉協議会
・吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議（2017）「千里ニュータウンの資料集（人口推移等）」
・田中康裕（2010）「地域住民が公共施設に開いた「ひろば」」・日本建築学会編『まちの居場所～まちの居場所をみつける／つくる～』東洋書店
・田中康裕（2017）『「まちの居場所」の継承にむけて』一般財団法人長寿社会開発センター・国際長寿センター
・田中康裕（2018）「ニュータウンの空き店舗に開かれた施設でない場所：ひがしまち街角広場（場所から考える高齢者の地域居住　第1回）」・高齢者住宅財団『財団ニュース』Vol.143
・日本建築学会編（2010）『まちの居場所～まちの居場所をみつける／つくる～』東洋書店
・山本茂, 宮本京子（2001）「千里ニュータウンにおける取り組みと展望」・『地域開発』Vol.444

[1] 千里ニュータウンのまち開きは1962年である。「ひがしまち街角広場」のある豊中市域の新千里東町は、1966年に入居が始まった。

[2] 「歩いて暮らせる街づくり」関係省庁連絡会議「『歩いて暮らせる街づくり』モデルプロジェクト地区の選定につ

いて」（2000年3月）のページより。
https://www.kantei.go.jp/jp/kakugikettei/2000/koukyoukouji/sentei.html

[3]「アダプト」（adopt）は「養子にする」という意味で、「アダプト活動」とは「道路や公園などの公共の場所をわが子のように慈しみ、愛情をもって面倒を見る＝清掃・美化する活動」のこと。豊中市では2001年度に導入され、2018年3月末現在で41団体が活動している（豊中市「アダプト活動」のページより）。
https://www.city.toyonaka.osaka.jp/kurashi/gomi_risaikuru_bika/machi_bika/machibika_activity/adaputo.html

[4]集合住宅の建替えが進み児童数が増加したことから、2009年からは小学校の運動会と地域の運動会とは再び別々に開催されるようになった。

[5]まち開き当初に入居し、年齢構成のグラフで山を構成している世代を、ここでは「第一世代」と呼んでいる。

[6]豊中市「新千里東町近隣センター地区市街地再開発事業に関連する都市計画の決定及び変更のお知らせ」のページより。
https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/toshikeikaku/tokei_topics/juran.html

[7]新千里東町では、歩行者専用道路が住区を巡っており、住民にとって日常生活に欠かせない動線となっている。近隣センター、幼稚園、小・中学校、東町公園といった主な場所は全て歩行者専用道路に面して配置されている。先にあげた新千里東町の「アダプト活動」は、この歩行者専用道路を清掃するものである。

[8]千里ニュータウン吹田市域の佐竹台では、団地の建替えにおいて「団地やその隣接地の住民だけではなく、佐竹台住区の住民誰もが府公社団地の建替え計画に意見を述べることができる、『佐竹台ラウンドテーブル』が設置されるという先駆的な試みが行われている（太田, 2018）。

[9]英単語のInstitutionは制度と施設という意味を持つ。

[10]さわやか福祉財団（2016）では「新地域支援事業における『通いの場』はまさに、『居場所・サロン』の仕掛けであ」ると指摘されている。

[11]2012年から千里ニュータウン研究・情報センター（ディスカバー千里）として活動を継続。

[12]豊中市「千里文化センター市民実行委員会について」のページより。
https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/korabo/siminzikkouiinkai.html

■プロフィール

田中康裕（たなかやすひろ）
Ibasho Japan　副理事長／千里ニュータウン研究・情報センター　事務局長

2007年、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士（工学）。大阪大学大学院特任研究員、清水建設技術研究所研究員を経て、2013年より岩手県において「居場所ハウス」の運営・調査に携わる。2014年より米国ワシントンDCの非営利法人・Ibashoがフィリピン、ネパールで進めるプロジェクトのサポートを行う。2015年よりIbasho Japan副理事長。大阪大学大学院在籍時から大阪府の千里ニュータウンにおいてまちの居場所、アーカイブ作りに関する研究・実践を続けており、2012年より千里ニュータウン研究・情報センター事務局長。
主な共著に『環境とデザイン（シリーズ〈人間と建築〉3）』（朝倉書店, 2008年）、『まちの居場所』（東洋書店, 2010年）。ウェブサイトはhttps://newtown-sketch.com。

財団ニュース
Vol.144
2019 Winter
一般財団法人 高齢者住宅財団
Foundation for Senior Citizens' Housing

高齢者の地域居住の推進をめざして

エイジング イン プレイス

新年のご挨拶

場所から考える高齢者の地域居住
第2回　「ひがしまち街角広場」が作り変える地域
Ibasho Japan　副理事長／千里ニュータウン研究・情報センター　事務局長　田中 康裕

地域居住における高齢者支援の現状と課題
第3回「家具等の転倒を防止する活動」（かぐてんぼう隊の活動）から③
一般社団法人わがやネット　代表理事　児玉 道子

海外の高齢者住宅
住まいの問題を考える②　―アメリカ・ナッシュビルより―
リサーチコンサルタント　クルーム 洋子

居住支援全国ネットワーク・参加団体の活動紹介
第7回　一般社団法人パーソナルサポートセンター（PSC）
一般社団法人パーソナルサポートセンター

財団ニュース Vol.144 2019 Winter
エイジング イン プレイス
一般財団法人 高齢者住宅財団